

小出兼久の低影響開発見聞録「ターナーズプリングスパーク」

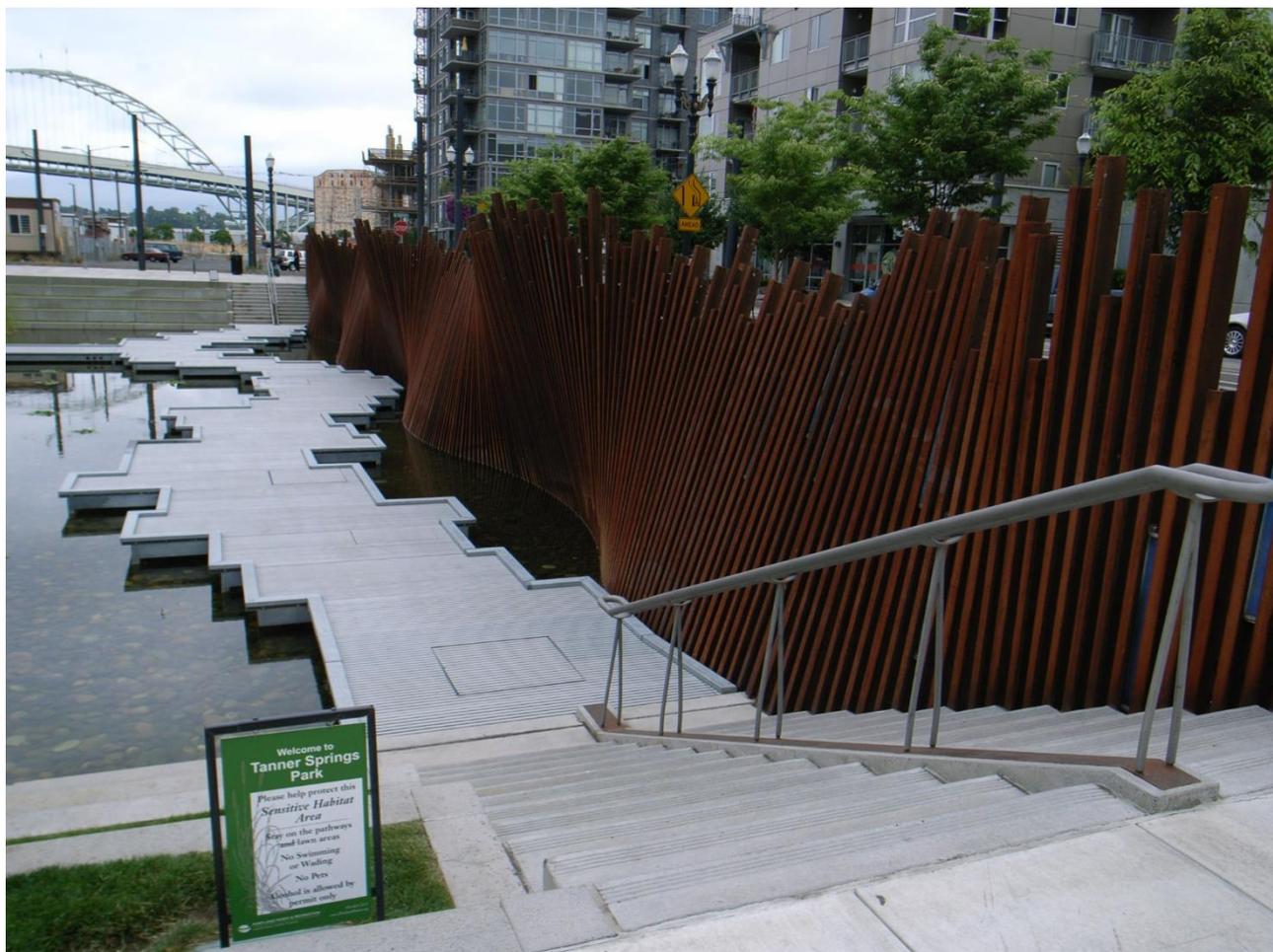
文：小出兼久 ランドスケープアーキテクト, ASLA & JXDA

低影響開発(Low Impact Development : L.I.D リッド)は、米国の市街地開発において用いられる統合的雨水管理のアプローチである。それは、雨水管理のグリーンな解決策 (LEED) のひとつであり、企業 (商工業) 用地、インフラストラクチャー、公共建築とその施設内プロジェクト、都市の自然公園および公園緑地、といった広範な計画と設計に組み込まれ、地域の美化に貢献する。その分岐点となる都市のマスター計画は 1990 年代初期に始まったが、まもなく米国の太平洋側北西部全域にわたって普及し、大通りや都市の公道を含むアーバンデザイン・プロジェクトの新たな可能性をもたらしてきた。

低影響開発 (以下略してリッド) が他の手法と異なる点は、それが持続可能なランドスケープ設計への関心を常に持っていることにある。言い換えるならば、リッドは、地方、州、全国レベルおよび国際的なレベルで持続可能な開発を促進する際に、指導的役割を提供してきたとも言える。それはまた、私が米国のランドスケープの現場の中で、実際に体験してきたことでもある。

ランドスケープにおける持続可能な設計は、我々のコミュニティに存在するさまざまな社会ニーズと経済や環境における技術や知識の統合を包含する。また、これら都市の生態的設計における知識や広範な経済発展プロジェクトにおける知識、および現在の土地利用の下で、住みよいコミュニティを作ることへの関心は、人口増加に対する都市の密度を決定することにもなる。

約 15 年余の間、米国の第一線で活躍するランドスケープアーキテクトへインタビューをしてきたが、彼らに共通する会話は、「・・・常に持続可能な設計をすること・・・そしてそれに加えて、持続可能なやり方で機能させ、運用・管理することを提供し始めている・・・。」そして「・・・それは、ランドスケープにとって、健康で低コストで皆が楽しめる方法を促進することになる・・・。」というものであった。この地のランドスケープアーキテクトたちは、現実的かつ新たな方向性として、今日の現況を把握した上で持続可能なプロジェクトに取り組むことを選択し、推進している。ランドスケープアーキテチャーにおける持続可能、それは、自然システムの模倣とも言えるものだが、その実現に新しい雨水管理は欠かせないものである。その呼称はともかく、米国では雨水管理の手法を開発プロセスに取り入れることはもはや当たり前のことである。この点、我々が学ぶべきことは多い。日本においても同様の解決が急務であり、雨水をめぐる問題が山積していることは間違いないからだ。しかし、雨水管理は米国でのみ発展してきたのではない。米国も他から学びつつ進めてきた。そこで今回は、リッドの取り組みがどのようにコミュニティの中に反映され、それにより都市がどのように変貌するのかを、ポートランドのあるプロジェクトを紹介することで考えてみたい。しかも、ここから見えてくるものは、雨水管理だけでなく、都市公園の新しい可能性とも言えるものなのである。

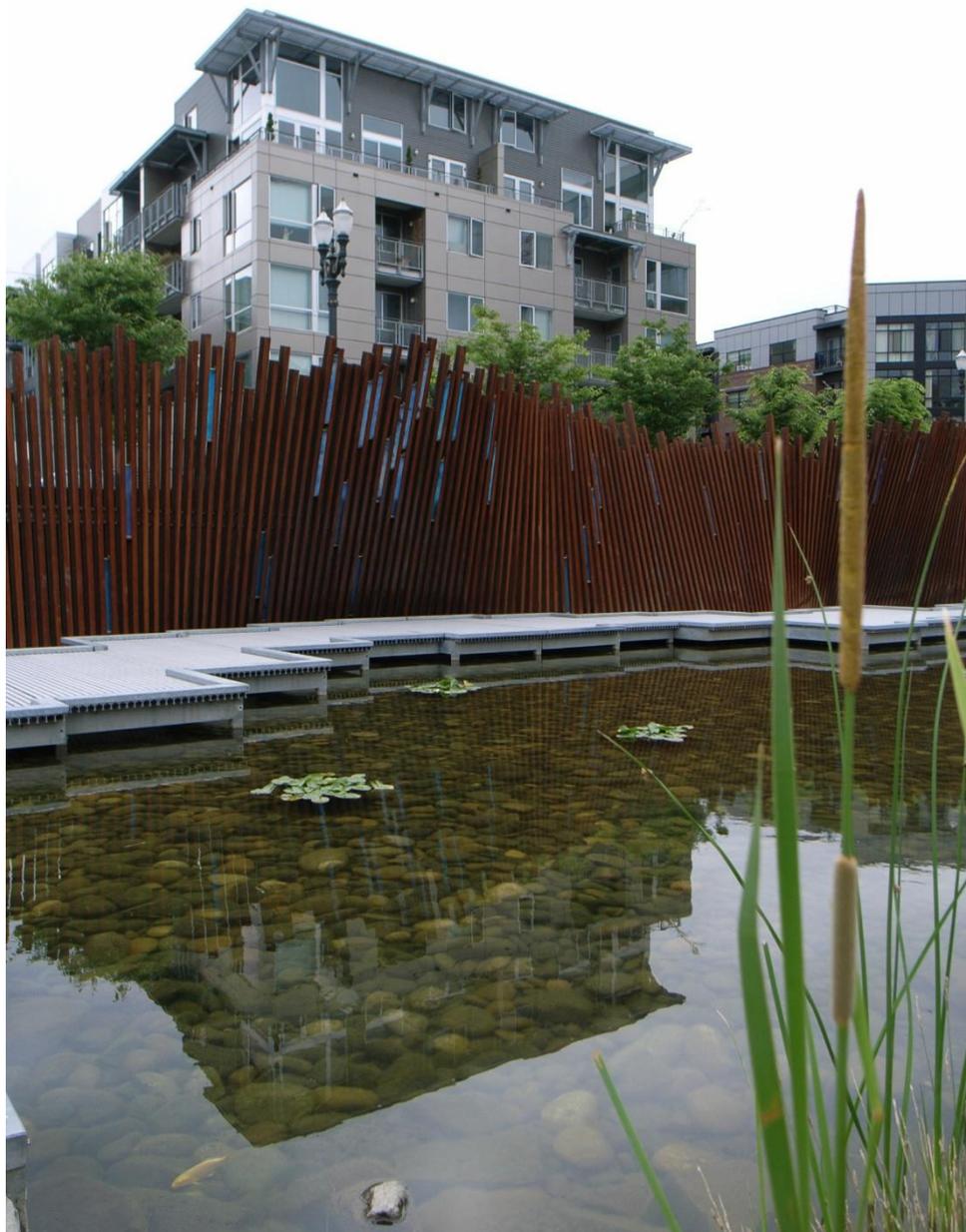


Tanner Springs Park ターナーズプリングスパーク

Portland, Oregon ポートランド、オレゴン 2005年8月オープン

ポートランド市パール地区の北西10番街とノースラップ通りの間に位置するこの公園は、2005年にオープンした都市公園である。しかし、一見するとわかるように、その姿は従来の都市公園とは随分異なるものであった。それゆえ現在でも論議が続き、果たしてこれが成功例なのかそうでない例なのかは、少なくともあと数年を待たなければならないという。

公園は、歩道レベルからほぼ1.8mほど低いところに位置している。まず敷地の一角を歩道と仕切るのには、電車レールを利用した高さ3.6mほどの壁である。ここは以前鉄道区で、そのレールを利用している。よく見ると、レールにはところどころに、何か動物のようなものが描かれたコバルトブルーの厚い装飾ガラスが埋め込まれているが、これはこの地の失われた動植物を表しているという。この公園を設計したドイツ人建築家兼アーティスト自らの手による作品である。この芸術的な壁を横目に手すりを伝って降りていくと、まず目にはいるのは浅い池であり、続いてその脇の湿地、さらに、枯れた草のたなびく草原、少し高台の盛土をした場所に青々とした芝生と樹木（樺）が展開する。ここにはこうして4つのはっきりした「生態系」が作り出されている。



ここは湿地を中心に構想された公園である。しかも、都市の市街地—最も密生した地域のひとつの中心に機能性のある湿地を作ったという試みで、都市いやおそらくは国家単位でも、他と比べようのない公園なのであった。現在では 2005 年の竣工から月日が経ってるため、全米唯一かは知るすべもないが、それでも米国で早々には増えないであろうタイプの公園なのである。その理由は後述するが、私は、ようやく本年夏にそこを訪れることができた。

これを手掛けたのは、ドイツ人の **Herbert Dreieitl** と彼のアトリエ及び受賞歴のある地元のファーム **GreenWorks (P.C.)** である。ことの起こりは 1990 年代初めに、ポートランド市とその近隣都市がオープンスペースのネットワーク化のゴールとして、この地の再整備を検討し始めたのに由来する。かつてこの地域は、ターナークリークとウィラメッテ川との間に広がる湿地であったが、その後産業鉄道区へと発展していたところだった。しかし、それも必要がなくなり、98 年にターナークリークと水機能運営委員会が提出した、新しい公園群とオープンスペースのコンセプトプランが市議会に承認される

と、99年6月にピーター・ウォーカーアンドパートナーズが、この河川域10番街と11番街の間に3つの新しい公園のコンセプトを描き出し、さらに、プロジェクト運営委員会と2つの公開ワークショップを経て計画を発展させ、より純化した計画が出来上がっていった。その計画うち、ここは、2番目に開発された地域である。

この公園の詳細な計画は、2003年に始まったが、その特徴は、設計プロセスが高度に対話型であったこと、つまり、2003年1月～6月の間、ポートランド市民を対象に一連の対話型の公開ワークショップを行ったことである。一連のワークショップは、市民がこの公園の設計プロセスに参加するのを許したため、近隣住民はこの時期からこの公園のコンセプトをある程度理解していたと言えよう。ちなみに、この市民が参画するというスタンスは管理体制に受け継がれている。現在、公園のメンテナンスは、ターナーズプリングス友の会というボランティア組織によって行われ、希望する市民は誰でも入会することができる。

その後、2004年6月に施工が始まり、2005年4月に「ターナーズプリングスパーク」という名前が付けられた。ここにあった泉は、かつてはこの地域からターナークリクへと繋がっていたのであるが、今日のそれは、大通りの下に配管された大きな管となっている。しかし、この公園は、湿地と人工的に作ったクリクによって、この地域の過去を取り戻すことを試みるもので、このためびつたりの名がついたのであった。

なぜこの公園が物議をかもしたのか。それを理解するためには、設計者について少し説明をする必要がある。設計者である Herbert Dreieitl は、ドイツの建築家で自身はアーティストでもあるが、特に、雨水管理を美的にデザインすることによって水による快適性を都市に演出する作品がよく知られている。ベルリンのポツダム広場の水景や2000年のハノーバー万博でも活躍したが、米国進出はこのターナーズプリングスパークが最初である。そんな彼がこの公園で設計の多くを割いたのは、雨水であった。普通の公園では、敷地に隣接する歩道からの排水は同じく隣接する溝へと導くのが一般的である。しかしここでは、歩道からの排水は勾配によって公園内へと導かれており、それらが集まるのは公園の骨格である浅い池と湿地である。彼はこれをビオトープと呼んでいるが、一時期日本で流行した「ビオトープ」と同じと考えると、若干趣が異なる。すなわち、計画が竣工すれば蝶もトンボも見られることは疑うべくもないが、ここで目的の第一にあげられたのは、雨水の浄化である。池から続く湿地での適した植物の組合せと砂によって、歩道からの雨水とこの敷地に降る雨（平年およそ100万ガロン）を自然に浄化するのである。つまり、バイオレテンション（生物滞留池）機能を設けている。通常バイオレテンション域は、45～60cm程度の深さが奨励されるのであるが、このように排水域が1/2エーカー以下の場合には、設計業者は浅いディッシュ（皿）型のバイオレテンション池を選ぶこともできる。雨水は砂利、残余、ミネラルという階層を経て地下のタンクに集められ、ろ過された雨水はウィラメッテ川へとポンプで排出される。池と湿地の浄化作用を補うために、紫外線を利用したフィルタが備え付けられ、自然処理が見逃す低レベルの汚染物質を除去している。雨水の幾分は池に留まりあるいは小川となって公園をめぐり、公園の上端でポンプアップされしづきとなり、その滴のハーモニーを調整するべく岩が慎重に配置されている。パーク&レクリエーション局（行政）のマネージャーであるヘンリー・クノースキーはこの公園を「都市のコンテクストにおける自然システムの事例研究である」と言い、環境局のスタッフは「人々は、それが実験なのだという理解を持つ必要がある。」と述べている。いずれも公園の性格を良く表している言葉であると思う。

周囲をビルに囲まれ、市街地の中に唐突に出現した草原と湿地。それはある種の郷愁を覚えさせ、新し

い美といも言えるものであった。しかもそれは、公共の大広場「公園」であるのと同時に、人々を試す公開の挙動テストの場ともなっている。すなわち、物議を醸し出す、いまでも賛否両論あるこの公園の評価。それは、幾つかの入口に設けられた標識から始まっている。標識には次のような文章が書かれている。

- ・ この敏感な生息地域を保護するのを手伝ってください。
- ・ 通路と芝生以外は立入禁止である。
- ・ 遊泳および立ち入り禁止。
- ・ ペット禁止。

いかがだろうか。これが論争の引き金である。断定はしないが、例えば、信号を無視して自由に道路を横切ったり、赤信号でも自転車を乗り回す人が見られ、街中の公園では犬を連れた光景がごく普通に見られるここポートランドで、竣工当時、このような規律が守られるのか否かという実効性は大いに話題になったようだ。地元のある人に言わせれば「信じられな—い」ということになる。しかし、この警告は本気だ。実際面、池や湿地がバイオレテンション域として水質浄化機能を維持するためには、システムの保持が大切であり、そのためには立入禁止にせざる終えないからである。個人の責任による規則順守。セルフレギュレーションというが、実際にどこまで順守されているのだろうか。興味はつきなかつた。なるほど、私が訪問したときには、あまり人陰はなかつた。芝生のベンチに座り、休息する姿、草原の小径を急ぐ子供が、ちらほらといったところか。

ターナーズプリングパークは、**Herbert Dreieitl**が都市の環境をできるだけ自然な姿にするために、心血を注いだ作品である。彼は、「都市の中で多くの場所は分けられがちである。都市には自然がない、自然の中には社会がない。私は両者を近代的な公園の中に持ってきてひとつにしたかった。緑の智慧によってね。」と言う。なるほどこれは新しい展望である。昨今の米国ランドスケープは、ノスタルジックな情緒を伴うナチュラル指向、それも、モダンスケープとナチュラルの統合というのがひとつの潮流となっている。おそらくはピーター・ウォーカーらから始まるミニマリズムにジェームス・ヴァン・スウェーデンによる草類の使用という事件から続く流れであるが、ここ 10 年の間に、さらに自然システムの復元という機能が加わった。その求める先が、持続可能なランドスケープへと結びつくのは間違いないが、この公園のように、都心でそれを行う場合には、従来求められてきた公園の在り方と異なるため、論議を呼ぶ可能性があるということだ。なるほど都心に原風景を模したような自然が出現することは、ひとつの価値があろう。まして水質浄化などの機能があるのだからなおさらだ。しかし、例えばこれが我々のように、視覚性を景観創出の第一の目的に永らく据えてきた国民ならば、その違和感や被るおそれのある不利益もそれほどではないかもしれないが、ここは、アウトドアリビングという野外での活動を景観設計の主目的にしてきた国である。今後の落としどころというか、趨勢が興味深い。ポートランド行政の評価はますますのようだ。もっともここは進取の気風に富む土地柄だからこそ、このような挑戦も許される。低影響開発は今後数十年の間、米国ランドスケープを牽引する役目を果たすであろうが、技術革新は日進月歩である。さらに、新しい都市公園、市民による公共運営の芽、アートとランドスケープの融合。我々にとって多くの教訓が実践されているポートランドは、これからも目の離せない地域となろう。